

「私の覚悟」

鳴門教育大学附属中学校 一年 喜多 花衣

私は、母方の祖母に会ったことがない。私の生まれる十七年前に亡くなったそう。母の実家の仏間には、四十一才の時の祖母の遺影が飾られている。並んでいる写真の中でも、ひときわ若い祖母の写真だ。

祖母は、今からちょうど三十年前、母が十八才の時に交通事故で亡くなった。トンネルの中で、過積載の大型トラックが対向車線から横すべりしてきて、祖母の軽自動車をつぶしてしまったそう。トンネルはゆるいカーブになっていて、過積載の上にスピードが法定速度以上出ているそのトラックは、ゆるいカーブの遠心力に耐えられずすべったそう。トンネルの中でなければ、祖母も逃げられたかもしれない。でも、つぶされてしまった。たくさんの人が輸血に協力してくれたけれど、祖母は亡くなってしまった。突然大切な人を失って、そのあと家族はバラバラになりかけたそう。

それから二十数年たった令和元年、祖父が亡くなった。そのお葬式の時、祖母を交通事故に遭わせてしまった人が、こっそり、ひっそり式場に来て手を合わせて謝っていたそう。私の母と叔父は、それを後で知って、「あの人も長い間苦しかったな。」と言っていた。

実は、私にも苦しいことがある。母の実家に帰省するときには必ずそのトンネルを通らなければならず、そこを通るたびに「おばあちゃんに会いたかったな。」と思うからだ。買い物に行く時も、みんなでご飯を食べに行く時も必ず通るトンネルだ。母や叔父や叔母は、いつもどんな思いであのトンネルを通っていたのかと思うと、とても辛い。

祖母の話については、たくさん聞いた。母は、事故のことを全て教えてくれた。だから母は今、朝私を送り出すとき、毎日「気をつけて。」と声をかけてくれていることも知っている。

私は祖母のこれまでのことから、交通事故というものは、一瞬にして大切なものを奪うばいさるものだと知った。また、亡くなった人への苦しみは、この先一生絶えないものだということも知った。「あの時、法令のとおり荷物を積んでいたら……あの時、法定速度を守っていたら……」。

人は「ちよつといいか」「まあいいか」と思ってしまうけれど、ルールが何のためにあるのかをしっかりと考えて、行動しなければならぬと思う。祖母のできごとから、私はこのことを一生心に留めて日々安全に生活していく。